

日本發送電株式會社建設部長

新井榮吉博士



新井建設部長

日本發送電株式會社が今春成立して、増田總裁以下、各部の陣容も早く決定した。何分非常時であり、議論の餘地なくドシドシ仕事を進めて行かねばならぬ新會社の事であるから、世間の噂は兎に角に迅速に行つた事は斯界のため欣快にたへない。

發送電會社は官民共同出資の時局會社で、日本の水力資源を統制して、合理的に有利に開發し、速かに産業に活用せんとする資本金7億3千餘萬圓の一大電力供給會社である。

此の新設會社の入容は官民各方面の水力電氣關係の技術家と事務家との合成體であるが、中に二人の社長がある。一人は大同電力會社社長であつた増田次郎氏、一人は大井川電力會社社長であつた工學博士新井榮吉氏である。増田氏は總裁になり、新井氏は建設部長となつた。増田氏は電力界の苦勞人であり、故福澤桃介氏の信賴を得て大同の社長になつた人である。増田氏は電氣協會長としても公共的に盡力しつゝあるが、學者肌の人でなく、官僚味など勿論ない。新會社の總裁とし

て好評を博してゐる所以である。それに大同電力會社は其一切の事業と全従業員を舉げて發送電會社に合流してをるのであるから、多數の部下の爲にも一層喜ばれる事であらう。

○

新井氏は大井川電力會社社長から單身で此新會社の建設部長に就任したのである。本來ならば相當の部下を引連れて行く處であらうが、單身唯一人、人間新井の自紙で行く處に無量の妙味があると思ふ。而して社長から部長にそれは一段も二段もの下役の如くに見られるが、それを意としない處に、新井氏の非常時局に對する技術報國の念、烈々たるものがあるのだと思ふ。

新井博士は日本の水力建設には内地臺灣等に多數の經驗を有し、土木學會副會長水力電氣協會會長等として公共に盡し、また學位論文たりし、調整池の特殊設計に關する著書も發行されてゐる。

○

日本發送電會社は本年中に約20ヶ所、出力

約40萬キロの水力發電と、其他火力約20萬キロの設備を起工せんとするのである。而して來年度約40萬キロ、三年目迄には合計100萬キロを起工せんとするのであるから、日本に於ける水力としては空前の大事業である。之を全部請負工事として施行する爲には、勞力資材俱に缺乏の際であるから、中々容易ならぬ仕事である。然し今日の日本は何れを見ても悉く容易ならぬ大事業を續々と實行しつつあるのである。

○

新井博士が異色多彩の技術家の寄合たる建設部を、今後如何に纏めて行くであらうか、それは技術界に於ける多大の關心事である。

日本發送電會社建設部創設の最初に於て、新井部長は部員に對し、先づ建設部の重大使命を説き、精神總動員的な心構へと覺悟を促し、次いで

大勢の技術家は皆夫々各社のエキスパートであり、其人々が此所に集つて戦争に出る様なものであるから、平沼首相の所謂「總親和總努力」が最も必要なのである。それ故建設部外とも連絡を密接にし、然も迅速に仕事を運び、各員が渾然一體となつて、日本發送電風の一種の社風を造りあげ度い。

世の中の仕事は二通りあつて、一は銀行の窓口の様に、お客の方から次々と仕事を以つて來るから、働く方は少しも怠る事がないが、建設工事は之と異り一種の創作であるから、工事擔當者自身が自發的に奮闘努力を要するのである。此點は大に積極的にやつて貰ひ度い、而して萬一失敗があつても、其原因が怠慢なる不注意から來たものでなく、誠心誠意でやつた上の失敗ならば、其責任は私が負ふのであるから、諸君は心配なく仕事に専念して貰ひ度い。

建設工事に用意周到なる注意を必要とする事は云ふまでもないが、新井博士は爰で、大石良雄が元録の義舉に、事を運ぶの用意周到なりし事例を引いて話題に一層の活を入れ、或は火野葦平の「土と兵隊」から敵の銃火の前に突撃する兵士の偉力は、分隊長の權能で

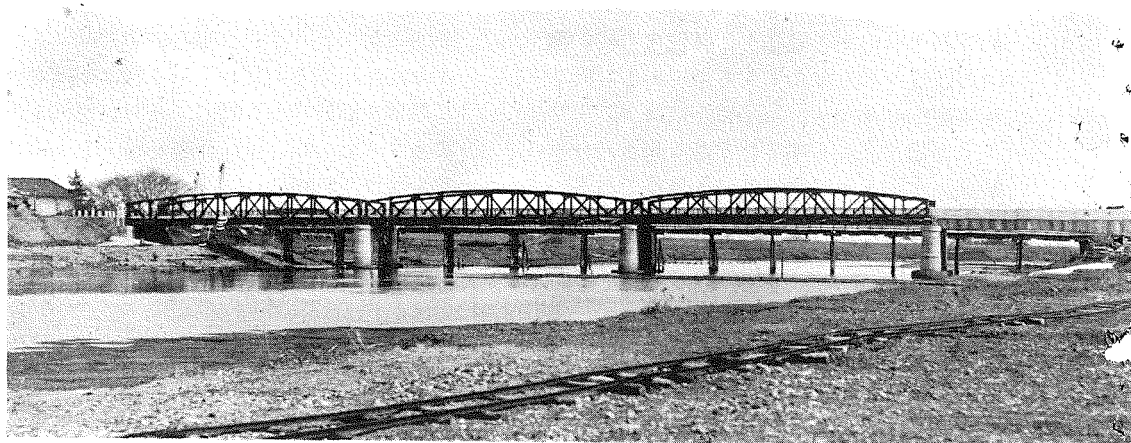
出来るのではなく、分隊長自身が兵士と俱にやるから出来るのだ、と云ふ様な事例を引いて話頭を新鮮にし、轉じてまた、建設工事に従事するものが、互に仕事を譲り合ふ事の不可を説いて落語の「三方一兩損」と云ふ大岡越前の奇智に富んだ裁判の話題を引用し、また人の性に説き及んでは、人の性は善なるものであるから、會社の社則丈でうまく行くものでないと説き、建設部の工事としては請負業者に最も關係の深い仕事をするのであるからとて、請負業者に對する心構へを次の様に述べた。

工事は設計、施工、監督が三位一體となつてやられれば良い工事は出來ない。施工は請負業者の力であるから、業者に對しては懇切丁寧に應接しなければならぬ。業者を敬視しては誠心がこもらぬから良い工事は出來ぬ。世間には忌はしき目的を抱いて苛酷な事を命令するものもありと聞くが、之は實に唾棄すべき事である。建設部員が業者に親切に接すると云ふ事は、兎角誤解の種となるのであるが、之は必ずしも無岡ヶしい問題ではない、各自が自肅自戒して、精神力のこもつた仕事をすれば良いのである。建設部各員は個々に秀れた力をもつてゐるのであるから、部員が渾然一體となつて足並を揃へ、協力一致して非常時局の重大責任を果し度いと思ふ。

斯くて日本發送電會社の建設部の旗擧げにより、群雄割據の日本の水力技術陣營に一つの大なる和合と光明が興へられたものと云ふべきである。而して新井建設部長の下に次長として、土木の野口寅之助氏、火力の赤澤政五郎氏、電氣の田邊文之助氏の三人がある。其他斯界に名を知られた中堅技術幹部の多數を以て固められてゐるのである。

○

三年後を待つ迄もなく社業も固まり、社風も出來、研究的な實行力も迅速に異彩を放つて來る事と思はれる。然し新井博士は曰く『僕は働かなくとも良いのだ』と。



1. 蛾 眉 橋 全 景

2. 蛾 眉 橋 (右岸正面)





(下流より望む、昭和14年3月28日)

3, 蛾眉橋 (左岸正面)

